みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

国立民族学博物館研究報告別冊 no.009; はじめに

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗田, 靖之, 八木, 祐子, 人見, 五郎, 月原, 敏博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3478

はじめに

研究の経緯

本書の刊行にかかわる研究は，1986年度から1987年度におこなわれた，国立民族学博物館共同研究「アッサムにおける民族誌的研究」に端を発している。この研究会は，インドのアッサム地方への調査隊派遣を念頭において，その実現にむけて努力するとともに，同地方に関する基礎的知識を習得するために開始されたものであった。

この研究会は，ガウハティ (Gauhati) 大学のマジョンダ博士 (Dr. D.N. Majumdar) と緊密な情報交換をおこない，同博士からは，ガロ (Garo) 族に関する詳細な文献目録が提供された。また共同研究班のメンバーからも，同地域の民族に関する文献目録が寄せられた。その間インド政府に対して，アッサムへの学術調査隊派遣の要請を行なってきたが，同地域への入域は予想外に困難であった。その結果，この研究会は，1987年3月に終了したのである。

一方，研究会の期間中に，栗田靖之（国立民族学博物館）が，インド政府の1961年に実施した国勢調査のデータをもとにして，コンピュータをもちいて北東インドにおける民族の分布を図化するこころみをおこなった。このデータにそれぞれの部族についての民族誌の文献目録を掲載して刊行することは，今後同地域の研究を継続していく上で，たいへん貴重な資料を提供すると思われたので，八木祐子（甲南大学非常勤講師）がその作業をおこなった。

研究会解散後は栗田とともにこの研究会のメンバーである八木，人見五郎（京都大学大学院）のほかにあらたに月原敏博（京都大学大学院）が加わり，4名でセンサス・データの分析と民族誌の文献目録の作成をおこなった。しかし4名の間では民族誌の文献目録の作成にとどまることなく，それぞれの部族にたいする民族誌からの情報を要約して記述することが，より有効な学術資料になると意見が出された。このように，当初のもくろみから，しだいに研究的興味が拡大していったのである。この研究を推進するために，この4名は毎週研究会を開催した。

本書の目的は，いままで情報が整理されていなかった北東インド地方の少数民族についての基礎的な事項を整理し，それにともなって関連する文献を集成することによって，同地域に注目する研究者の利便をはかることにある。われわれ自身も，本書を作成する段階で得られた資料をもとにして，各自それぞれの関心領域における研究

を発展させるつもりである。そのための第一歩として本書を位置づけている。

民族の定義

北東インド地方の民族誌を要約するとき，各部族を北東インド全体のなかでどう位置づけるかは，非常に重要であるが，また非常に難しい。中国南西部，ビルマ，ブータン，バングラデシュと国境を接し，少数民族の多いこの地方では，他の地方以上に厄介な問題をはらんでいる。

まず第一に問題となるのは，部族の定義である。しかしその定義は，すこぶる困難である。インドでは政治的には，指定カースト (scheduled caste) ないしは，指定部族 (scheduled tribe) に指定されると，国会の下院にあたるローク・サバ(Lok Sabha 人民院）および州の立法府の議席の留保がおこなわれる。この指定カースト，指定部族は大統領が命令により規定するとされている [落合　1970: 83–87]。

インド憲法342条第1項では，大統領は知事との協議により，ある特定の部族，部族共同体，ないしは部族の中の特定の集団を指定部族とする，と規定されている。第2項においては，議会に対しては，第1項において大統領が指定した部族を以後の法律において変更してはならないと規定している。同様の規定は第16条4項にもあり，この憲法の条項によって，国家が後進社会階級に与えた指定職や地位，国家によるサービスを，いかなる者も妨げてはならない，と規定している。

第46条においては，国家は国民の中の弱者，とくに指定カーストと指定部族の人々の教育的，経済的利益を特別の配慮をもって促進しなければならない。そして，それらの人々を社会的不正義や搾取から守らねばならない，とされている。

第335条においては，指定カーストと指定部族からの要求は，つねに行政上または中央直轄地および国家のサービスや地位に関して特別の配慮がされなければならないとしている。

このような憲法上の規定を受けて，法律的には，どの部族を指定するかの法律的根拠は明らかにされているが，それではどうしてその部族を一つのユニットとしたのかの社会学的，ないしは民族学的定義は示されていないのである。

マジョンダ博士もわれわれの研究会に対する手紙の中で，部族 (tribe) について次のように述べている。「インドの憲法は，部族についての定義をしていないし，それのみならず，部族についての条件をも規定していない。ある共同体を部族として扱っている地域もあれば，他の州や同じ州の中でも他の地域では，その共同体を部族とは呼んでいないこともある。それゆえ，北東インドにおいては，非アーリアン言語を話し

ているか，または起源的に非アーリアン言語を話していたと考えられ，ヒンドゥー教以外の宗教を信仰している共同体を部族と呼んでいる。」われわれも，第一義的には部族についてこのようなマジョンダ博士の定義を採用する。しかし，われわれの研究では，メイテイ族などいくつかの部族においては，過去の信仰を捨て現在はヒンドゥー教を信仰している部族もとりあげた。

次に，本書で北東インドという言葉でよばれている地域は，かつてはアッサム (Assam) と総称され，現在ではアッサム (Assam)，アルナチャル (Arunachal)，マニプール (Manipur)，ミゾラム (Mizoram)，メガラヤ (Meghalaya)，ナガランド (Nagaland)，トリプラ (Tripura) の7つの州に分割されている地域を指している。アルナチャル・プラデシュは，1972年以前には，北東辺境地方(North-East Frontier Aqency) と呼ばれていた。アッサム地方の歴史的な経緯については，栗田が「イギリス支配以降の北東インド」の項で詳述しているので，参照していただきたい。

『センサス・オブ・インディア』の問題点

本書にとりあげた北東インド地方の民族は，基本的には，インド政府の発行した1961年度版のセンサスに，指定部族としてとりあげられているものである。

しかしながら，インド政府発行のセンサスは，編集方針が年度によって異なり，また各地方の編集者によっても，部族の分類の仕方が違っている。たとえば，1961年度版のセンサスでは，ナガ (Naga) 諸族の場合，ナガランド州，アッサム州では，ナガと一括して分類されているが，マニプール州では，アンガミ・ナガ (Angami Naga)，カチャ・ナガ (Kacha Naga) などに細かく分けられている。このように上位分類にあたるものと，下位分類にあたるものが混在しているケースもあった。1971年度版のセンサスでも，各部族ごとの人口があげられているが，アルナチャル・プラデシュだけが，非常に細かく分類されている。このように，センサスを通じての同定の基準が定かでない。それのみならず1981年度版のセンサスでは，タウン (Town)，ディストリクト (District) ごとには人口の統計があげられているが，各部族ごとの人口は示されていない。しかし指定部族としての部族名のリストは掲げられている。それぞれの年度における民族分類の対比は，表1を参照されたい。

したがって，1961年度版のセンサスをもとにして，1971，1981年度版のセンサスと照らしあわせながら，本書であつかう部族を選びだした。さらに，1961年度版のセンサスに部族の名前は載っているが，部族についての情報がきわめて少ないものや，サンタル (Santal) 族，ムンダ (Munda) 族などアッサム地方の部族としてとりあげる

のは不自然なものは省き，またメイテイ (Meitei) 族，ガロン (Gallong) 族など1961年度版のセンサスには載っていないが，必要と思われる部族については，適宜それを加えた。

言語による分類

ここで，北東インドにおける諸民族の言語的な分類について述べておきたい。語族にしたがって，アッサム地方の部族を分類すると，

1. タイ (Thai) 系
2. オーストロ・アジア (Austro-Asia) 系
3. シナ・チベット (Sino-Tibetan) 系

に大きく分かれる。北東インド地方の部族のうち，ほとんどがシナ・チベット系に属する。

シナ・チベット系は，チャイニーズ(Chinese)とチベット・カレン(Tibeto-Karen)グループに大きく分かれ，チベット・カレン・グループはまた，カレン (Karen) 語族とチベット・ビルマ (Tibeto-Burman) 語族に分かれる。

北東インド地方の部族の9割にあたるものが，このチベット・ビルマ語族に属している。チベット・ビルマ語族で大きいのは，アボール・ミリ・ダフラ (Abor-Miri-Dafla 研究者によっては，北アッサム語群と呼ばれることもある) 語群，ボド・ナガ(Bodo-Naga)語群である。各部族がどの語群に分類されるかについては，表2に示している。北東インド地方の語族の分類の仕方は，研究者によって異なっている。分類にあたっては，国立民族学博物館の長野泰彦氏に御教示をいただき，文末の文献を参考にした。

本書では，アボール・ミリ・ダフラ語群およびボド・ナガ語群のうちボド群を栗田が，ボド・ガロ群を人見が，クキ・ナガ語系のうち，ナガ群を月原が，クキ・チン群を八木が，それぞれ担当して執筆した。また，タイ系も月原が担当した。なお，オーストロ・アジア系に属する部族については，ここでは一部のみを取り扱った。

なお本文中でたびたび用いられるアッサミーズ (Assamese) ないしはアッサム人という言葉の概念について述べておかねばならない。この場合アッサミーズとは本来的には，アッサム語を話す人々を意味している。アッサム語はベンガル語と近縁関係にあり，表記法はベンガル語を借用している。宗教的には，大多数がヒンドゥー教徒であるが，回教徒やシク教徒，キリスト教徒をも含んでいる。アッサミーズないしはアッサム人と呼ばれる大きな理由は，彼らがいわゆる部族民ではないということである。それゆえ，アッサム人とは，アッサムの平原に住み，アッサム語を話し，部族民では

ない人びとを指している。実際，男性は洋風化されたシャツとズボン姿が圧倒的である。しかし，女性は，メケラ (mekhela) と呼ばれるスカートとチャッダル (chadar) と呼ばれるスカーフからなる二枚布の伝統的な民族衣装を着ている。しかし外見的には，他のインドの町で見かける人びととなんら変わるところがない。

表記と小見出し

固有名詞のカタカナ表記は，できる限り原音再現を原則とした。しかし，初出の固有名詞には，アルファベットつづりを並記した。ただし，クラン名など，カタカナ表記のむつかしいものは，アルファベットつづりのままとした。

なお文中の＜　＞でかこまれたのは小見出しである。この小見出しは，アメリカ合衆国の「地域人間関係ファイル協会」(Human Relations Area Files) が開発した『文化項目分類』(OCM) の分類にしたがった。このコードに関しては，『文化項目分類』[マードック，G. P. ほか　1988] を参照されたい。

索引は，本文中の部族名，文化項目事項を選んで見出し語とした。利用者は，この索引によって，本文中の記載事項を検索するのみならず，巻末に記載されている文献リストによって，より詳細な情報源にたどりつけるであろう。

また本書に掲載した写真はわれわれの依頼に従ってマジョンダ博士が撮影したものと，1989年に栗田が撮影したものである。

文献とインフォーマント

本研究は，文献資料を中心にして，それを輪読し分析した。さいわい国立民族学博物館には，相当数のアッサム地方に関する文献が集積されている。また研究会のメンバーが渡印するごとに，同地域に関する文献を購入してきた。

これらの文献を利用してわれわれはできる限り，1800年代の古典的な文献も視野にいれながら，最近のインド人研究者の成果を紹介することに主眼をおいて本書を編集した。分析の対象とした文献は，できる限りフィールドワークにもとづくものを選択したが，その部族に関する情報がとみに不足している場合，その情報についてクロス・チェックが十分に行えない場合もあった。

幸い，1989年2月，栗田はアッサム州，メガラヤ州，マニプール州への入域許可を得て，有意義な情報や資料を得ることができた。これらの情報はできる限り本書に盛り込むように努力した。しかし，現地で新たに入手した資料や文献については，時間的余裕がなく，十分活用できていないものもある。これらについては，今後加筆する

ことを期したい。

次に，本書の記述に関して種々有意義な助言をいただいた方々の名前を記して，感謝の意を表わしたいと思う。

本書の刊行に際して，その当初の段階から資料を提供していただき，栗田の調査に際しても，フィールドへ案内して下さったマジョンダ博士に深く感謝する言葉を申しのべたい。

プラディプ・ダス (Pradip Das) 氏は，ディブルガル (Dibrugarh) に駐在するアルナチャル州の通商・供給公社 (Arunachal Pradesh Co-operative Marketing and Supply Federation Ltd.) の副書記官の職にあり，兵役とその後のアルナチャル州官僚として，長年にわたって部族社会に関係してこられた人物である。本文中 [Pradip Das による] と記述されているのは，彼をインフォーマントとした情報である。

ビピン・ボルゴハイン (Bipin Borgohain) 氏は，アホム王国の大臣であるゴハインの子孫にあたられる方である。同氏は，1947年のインド独立以後の初代 N.E.F.A. のポリティカル・オフィサーを勤められた方であり，アホム王国の歴史に関して，有意義なコメントをいただいた。

パルル・チャンドラ・ダッタ (Parul Chandra Dutta) 博士は，アルナチャル州の研究機関の長をつとめておられ，自らが調査されたノクテ族，タンサ族，ワンチョー族などについて有意義なコメントとサジェッションをいただいた。

マハンタ (K. C. Mahanta) 博士は，ディブルガル大学が収集している数かずの資料や民具を見せてくださり，部族社会の理解に大きな手助けとなった。

ガングムメイ・カブイ (Gangmumei Kabui) 博士は，マニプール大学 (Manipur University) の歴史学の教授であり，カブイ族の出身ということもあって，マニプール州におけるナガ族，とりわけジェリアンロン (Zeliangrong) 族について，貴重な情報をお教えいただいた。

同じくマニプール大学の人類学のブディ・シン (C. H. Budhi Singh) 教授は，ガロ族についての記述に関して，相談にのっていただいた。

マニプール州文化アカデミー (Manipur State Kala Academy) 長官，ダモダル・シン (L. Damodar Singh) 氏からは，マニプールの部族社会についての数かずの資料をいただいた。

またマニプール州経済・統計局長，アムレイ・シン (N. Amurei Singh) 氏からは，最近の統計資料をいただいた。

照葉樹林文化論に代表されるように，今日この地域への関心は高まりつつある。こ

のような研究の潮流からもうかがえるように，アッサム地方の少数民族は，インド，バングラデシュのみならず中国の雲南省，ビルマ，ブータンの少数民族とも関連が深いが，これらの地域の少数民族は，その地方ごとに呼称が異なり，対応関係が十分に付けられていない。われわれは，多くの呼称を持つこれらの少数民族を，インドのアッサム地方を中心にして，可能な限り対応関係を付けようと努力した。不十分な点を御指摘いただくとともに，次の段階として各地域，国ごとに異なる呼称を整理し，対応関係を整理することが，今後の研究の発展を促すことになるであろう。

最後に，本書の原稿をコンピュータに入力し，校正や検索語の抽出など一連の編集作業を，献身的にやりとげて下さった藤井恵子さんに，深く感謝の意を表わしたいと思う。

1989年3月

栗田靖之
八木祐子
人見五郎
月原敏博

［表１］

（数字は人口をあらわしている）

○ARUNACHAL PRADESH（1972年以前は N.E.F.A. と呼ばれていた）

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
1. Adi Bhutan	1	1. Abor	4,733	1. Abor
		2. Adi	5,520	
		3. Adi Gallong	334	
		4. Adi Miyong	25	
		5. Adi Padam	1,094	
		6. Adi Pasi	209	
2. Aka	18	7. Aka	2,345	2. Aka
3. Apatani	156	8. Apatani	12,888	3. Apatani
4. Ashing	46	9. Ashing	959	
5. Bangni	28	11. Bangni	21,785	7. Kowa
		39. Khowa Bangni	703	
		94. Tagin Bangni	1,730	
		104. Yanoo Bangni	1,578	
		40. Khrodeng	1	
6. Bangro	8	12. Bangro	1,085	
7. Bokar	80	14. Bokar	2,721	
8. Bori	58	17. Bori	78	
9. Dafla	169	19. Dafla	5,926	4. Dafla
10. Digaru	100	22. Digaru/ Taraon Mishmi	5,384	
11. Galong	879	24. Gallong	38,688	5. Galong
14. Khamba	23	36. Khamba	848	
15. Khampti	49	38. Khampti	4,078	6. Khampti
		100. Thai Khampti	8	
16. Libo	4	45. Libo	14	
17. Momba	66	63. Momba	2,486	9. Momba
18. Miju	107			
19. Mikir	21	57. Mikir	1,298	
20. Milang	21	58. Millang	2,595	
21. Minyong	1,228	59. Miniyong	19,146	
22. Miri	253			
23. Mishing	8	60. Mishing/Miri	3,359	
24. Mishmi	210	61. Mishmi	808	8. Mishmi
12. Idu	182	29. Idu/ Chulikata Mishmi	8,136	
13. Kaman	1	31. Kaman/ Miju Mishmi	8,233	
25. Monpa	294	18. But Monpa	555	
		23. Dirang Monpa	1,716	
		48. Lish Monpa	1,046	
		64. Monpa	23,319	
		76. Panchen Monpa	747	
		99. Tawang Monpa	741	
26. Nishang	10	70. Nishang	15,462	
27. Nocte	66	47. Liju Nocte	4	
		72. Nocte	23,165	

			81. Ponthai Nocte	247	
			102. Tutcha Nocte	911	
28. Padam	610		74. Padam	9,864	
29. Pailibo	18		75. Pailibo	1,190	
30. Pangi	15		77. Pangi	593	
31. Pasi	11		78. Pasi	1,944	
32. Ramo	8		82. Ramo	655	
33. Sherdukpen	10		86. Sherdukpen	1,639	11. Sherdukpen
34. Shimong	1		87. Simong	3,140	
35. Singpho	26		89. Singpho	1,567	12. Singpho
36. Sulung	3		91. Sulung	4,250	
			92. Sulung Bangni	38	
37. Tagin	228		93. Tagin	20,377	
38. Tangsa	165		15. Bolok Tangsa	3	
			20. Darok Tangsa	5	
			25. Haisa Tangsa	1	
			26. Havi Tangsa	699	
			28. Hotang Tangsa	1	
			33. Katin Tangsa	1	
			34. Kemsing Tangsa	391	
			35. Khalim Tangsa	2	
			43. Korang Tangsa	1	
			44. Langkai Tangsa	11	
			46. Lichi Tangsa	2	
			49. Longchang Tangsa	21	
			50. Longin Tangsa	9	
			51. Longphi Tangsa	156	
			52. Longri Tangsa	133	
			53. Longsang Tangsa	375	
			54. Lowang Tangsa	1	
			62. Moglum Tangsa	1,486	
			65. Morang Tangsa	123	
			66. Mossang Tangsa	1,288	
			68. Namsang Tangsa	3	
			69. Ngimong Tangsa	4	
			79. Phong Tangsa	1	
			83. Rangai Tangsa	1	
			84. Rongrang Tangsa	538	
			85. Sanke Tangsa	10	
			88. Simsa Tangsa	2	
			95. Taisen Tangsa	4	
			97. Tangsa	6,941	
40. Tikhak	2		101. Tikak Tangsa	1,169	
			107. Yongkur Tangsa	29	
			108. Yongli Tangsa	135	
			10. Bagi	2,063	
			16. Bomdo	294	
			21. Deori	2,683	
			27. Hill Miri	8,174	
			30. Janbo	210	
			32. Karka	2,118	

		41. Komkar	73		
		42. Kongbo	375		
		55. Meyor	100		
		56. Miji	3,549		
		67. Muktum	2		
		71. Nissi	33,805		
		73. Nonong	1		
		80. Pongkong	5		
		90. Siram	8		
		98. Taram	3		
41. Wancho	11	103. Wancho	28,650		
		105. Yatong	158		
		106. Yobin	929		
		109. Zakhring	23		
		13. Bogum	473		
		37. Khamiyang	29		
		96. Tangam	84		
39. Tayeng	1				
				10. Any Naga Tribes	

○MANIPUR

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
1. Aimol	108	1. Aimol	836	1. Aimol
2. Anal	4,868	2. Anal	6,670	2. Anal
3. Angami	632	3. Angami	70	3. Angami
4. Chiru	1,809	4. Chiru	2,785	4. Chiru
5. Chote	1,035	5. Chote	1,905	5. Chote
6. Gangte	4,856	6. Gangthe	6,307	6. Gangthe
7. Hmar	15,365	7. Hmar	23,312	7. Hmar
8. Kabui	29,218	8. Kabui	40,257	8. Kabui
9. Kacha Naga	9,734	9. Kacha Naga	13,026	9. Kacha Naga
10. Koirao	406	10. Koirao	1,620	10. Koirao
11. Koireng	531	11. Koireng	458	11. Koireng
12. Kom	5,477	12. Kom	6,550	12. Kom
13. Lamgang	1,866	13. Lamgang	2,622	13. Lamgang
14. Mao	28,810	14. Mao	33,379	14. Mao
15. Maram	4,928	15. Maram	4,539	15. Maram
16. Maring	7,745	16. Maring	9,825	16. Maring
17. Any Mizo (Lushai) tribes	2,745	17. Any Mizo (Lushai) tribes	7,483	17. Any Mizo (Lushai) tribes
18. Monsang	1,342	18. Monsang	930	18. Monsang
19. Moyon	647	19. Moyong	1,360	19. Moyon
20. Paite	17,029	20. Paite	24,755	20. Paite
21. Purum	82			21. Purum
22. Ralte	84	21. Ralte	154	22. Ralte
23. Sema	4	23. Sema	3	23. Sema
24. Simte	2,818	24. Simte	4,177	24. Simte
25. Tangkhul	43,943	25. Tangkhul	57,851	26. Tangkhul
26. Thadou	47,994	26. Thadou	59,955	27. Thadou
27. Vaiphui	8,215	27. Vaiphui	12,347	28. Vaiphui

28. Zou	6,761	28. Zou	10,060		29. Zou
		22. Sahte	3		25. Sahte
		29. Unspecified	1,227		

○ASSAM

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
1. Barmans in Cachar	13,114	1. Barmans in Cachar	13,210	II) 1. Barmans in Cachar
2. Boro Boro Kachari	345,983	2. Boro Boro Kachari	610,453	II) 2. Boro Boro Kachari
3. Chakma	19,338	3. Chakma	22,789	I) 1. Chakma
4. Deori	13,876	4. Deori	23,080	II) 3. Deori
5. Dimasa (Kachari)	68,718	5. Dimasa (Kachari)	39,344	I) 2. Dimasa Kachari
6. Garo	258,122	6. Garo	9,161	I) 3. Garo
7. Hajong	22,652	7. Hajong	387	I) 4. Hajong
8. Hmar	8,741	8. Hmar	13,230	I) 5. Hmar
9. Hojai	3,617	9. Hojai	2,298	II) 4. Hojai
10. Kachari including Sonwal	236,936	10. Kachari including Sonwal	198,619	I) 5. Kachari Sonwal
11. Khasi and Jaintia	356,155	11. Khasi and Jaintia	6,704	I) 6. Khasi, Jaintia, Synteng, Pnar, War, Bhoi, Lyngngam
12. Any Kuki tribes	19,037	12. Any Kuki tribes	21,034	I) 7. Any Kuki tribes
13. Lakher	8,791	13. Lakher	12,871	
14. Lalung	61,315	14. Lalung	95,609	II) 6. Lalung
15. Man (Tai-speaking)	253	15. Man (Tai-speaking)	964	
16. Mech	6,987	16. Mech	2,570	II) 7. Mech
17. Mikir	121,082	17. Mikir	177,195	
18. Miri	163,453	18. Miri	259,551	II) 8. Miri
19. Any Mizo tribes	214,721	19. Any Mizo tribes	242,689	
20. Any Naga tribes	9,309	20. Any Naga tribes	8,495	
21. Pawi	4,587	21. Pawi	20,447	
22. Rabha	108,029	22. Rabha	138,630	II) 9. Rabha
		23. Synteng	611	I) 6. Khasi, Jaintia, Synteng, Pnar, War, Bhoi, Lyngngam

I) は，自治区
II) は，自治区を除くアッサム州

○MEGHALAYA

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
		1. Chakma	9	1. Chakma
		2. Dimasa (Kachari)	834	2. Dimasa, Kachari
		3. Garo	324,197	3. Garo
		4. Hajong	19,558	4. Hajong
		5. Hmar	198	5. Hmar
		6. Khasi and Jaintia	456,674	6. Khasi, Jaintia, Synteng, Pnar, War Bhoi, Lyngngam
		7. Any Kuki tribes	2,337	7. Any Kuki tribes
		8. Mikir	5,077	11. Mikir
		9. Any Mizo (Lushai) tribes	3,110	10. Any Mizo (Lushai) tribes
		10. Any Naga tribes	860	12. Any Naga tribes
		12. Synteng	48	
		11. Pawi	222	13. Pawi
		13. Unspecified	1,106	
				8. Lakher
				9. Man (Tai speaking)

○TRIPURA

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
1. Bhil	69	1. Bhil	169	1. Bhil
2. Bhutia	7	2. Bhutia	3	2. Bhutia
3. Chaimal	50	3. Chaimal	—	3. Chaimal
4. Chakma	22,386	4. Chakma	28,662	4. Chakma
5. Garoo	5,484	5. Garoo	5,559	5. Garoo
6. Halam	16,298	6. Halam	19,076	6. Halam
7. Jamatia	24,359	7. Jamatia	34,192	7. Jamatia
8. Khasia	349	8. Khasia	491	8. Khasia
9. Kuki	5,531	9. Kuki	7,775	9. Kuki
10. Lepcha	7	10. Lepcha	14	10. Lepcha
11. Lushai	2,988	11. Lushai	3,672	11. Lushai
12. Mag	10,524	12. Mag	13,273	12. Mag
13. Munda including Kaur	4,409	13. Munda including Kaur	5,347	13. Munda, Kaur
14. Noatia	16,010	14. Noatia	10,297	14. Noatia
15. Orang	2,875	15. Orang	3,428	15. Orang
16. Riang	56,597	16. Riang	64,722	16. Riang
17. Santal	1,562	17. Santal	2,222	17. Santal
18. Tripura, Tripuri, Tippera	189,799	18. Tripura, Tripuri, Tippera	250,545	18. Tripura, Tripuri, Tippera
19. Uchai	766	19. Uchai	1,061	19. Uchai
		20. Unspecified	36	

○NAGALAND

1961年センサスの分類		1971年センサスの分類		1981年センサスの分類
1. Abor	4			
2. Aka	4			
3. Dimasa (Kachari)	2,376	2. Dimasa (Kachari)	4,329	2. Kachari
4. Gallong	4			
5. Garo	504	1. Garo	934	1. Garo
6. Khasi and Jaintia (including Khasi, Synteng, Pnar, War, Bhoi, Lyngngam)	53			
7. Khowa	1			
8. Any Kuki tribes	3,244	3. Any Kuki tribes	6,206	3. Kuki
9. Mikir	466	4. Mikir	519	4. Mikir
10. Any Mizo (Lushai) tribes	163			
11. Momba	12			
12. Any Naga tribes	336,820	5. Any Naga tribes	445,266	5. Naga
13. Synteng	46			
		6. Unspecified	348	

○MIZORAM

1961年センサスの分類	1971年センサスの分類	1981年センサスの分類
		1. Chakma
		2. Dimasa, Kachari
		3. Garo
		4. Hajong
		5. Hmar
		6. Khasi, Jaintia Synteng, Pnar, War Bhoi, Lyngngam
		7. Any Kuki tribes
		8. Lakher
		9. Man (Tai speaking)
		10. Any Mizo (Lushai) tribes
		11. Mikir
		12. Any Naga tribes
		13. Pawi
		14. Synteng

＊注1　センサスの分類および数字は

1961年度　Census of India 1961, vol. I, India
Part V-A (ii) Special Tables for Scheduled Tribes by A. Mitra of the Indian Civil Service Registrar General and Ex-officio Census Commissioner for India

1971年度　Census of India 1971, Series-1, India
Part V-A (ii) Special Tables for Scheduled Tribes by A. Chandara Sekhar of the Indian Administrative Service Registrar General and Census Commissioner, India

1981年度　Census of India 1981, Series-1, India
Part II B (iii) Primary Census Abstract Scheduled Tribes by P. Padmanabha of the Indian Administrative Service Registrar General and Census commissioner, India

に依拠している。

＊注2　1961年度の表1の人口と本文中の各民族分布図の中で使用された人口は必ずしも一致しない。本文中の人口は [Sen, D. K. 1971] に依拠している。

＊注3　1981年はインド政府の政策により，各民族ごとの人口は挙げられていない。

＊注4　部族名のスペルは，地域および年度ごとに異なっている。たとえば ARUNACHAL PRADESH のギャロン族は，1961年度は Galong，1971年度には Gallong と記述され，1981年度はふたたび Galong になっている。

[表2]　語族の分類

◎タイ (Thai)……カムティ (Khamti), アホム (Ahom), ファキャール (Phakiyal)
◎オーストロ・アジア (Austro-Asia)
……サンタル (Santal), ムンダ (Munda), ビール (Bhil), オラング (Orang), カーシ (Khasi), カーシ・アンド・ジャインティア (Khasi and Jaintia), シンタン (Synteng)
◎シナ・チベット (Sino-Tibetan)
チャイニーズ (Chinese)
チベット・カレン (Tibeto-Karen)
○カレン (Karen) 語族
○チベット・ビルマ (Tibeto-Burman) 語族
チベット・カナウリ (Tibeto-Kanauri) 語群
アボール・ミリ・ダフラ (Abor-Miri-Dafla, 北アッサム諸族) 語群
……アカ (Aka), ミシュミ (Mishmi), ダフラ (Dafla), バングニ (Bangni), バングル (Bangru), シュラング (Sulung), プレイン・ミリ (Plain Miri), ヒル・ミリ (Hill-Miri), アディ (Adi), コア (Khoa), アパ・タニ (Apa Tani), タギン (Tagin), ミニョン (Minyong)
カチン (Kachin) 語群……シンポ (Singpho)
バーミーズ・ロロ (Burmese-Lolo) 語群……マン (Man), ヨビン (Yobin)
ボド・ナガ (Bodo-Naga) 語群
〔ボド・ガロ (Bodo-Garo, ボド語系) 語系〕
ボド・ガロ (Bodo-Garo) 群
……ボロ・ボロ・カチャリ (Boro-Boro Kachari), ディマサ・カチャリ (Dimasa Kachari), メチ (Mech), ラルン (Lalung), ホジャイ (Hojai), トリプリ (Tripuri), リアン (Riang), ノアティア (Noatia), ジャマティア (Jamatia), デオリ (Deori), ラブハ (Rabha), ガロ (Garo)
ボド (Bodo) 群
……ブティア (Bhutia), メンバ (Memba), カンバ (Khamba), モンパ (Monpa), シェルドゥクペン (Sherdukpen), ミジ (Miji)
〔クキ・ナガ (Kuki-Naga) 語系〕
ナガ (Naga) 群
……カチャ・ナガ (Kacha Naga), ノクテ (Nocte), ワンチョー (Wancho), タンサ (Tangsa), セマ (Sema), アンガミ (Angami), マラム (Maram), コイラオ (Khoirao), マオ (Mao), マリング (Marring), タンクール (Tangkhul)
クキ・チン (Kuki-Chin) 群
……クキ(Kuki), タドー(Thadou), ゾウ(Zou), メイテイ (Meitei), チル (Chiru), ヴァイフェイ(Vaiphei), パイテ(Paite), ラルテ(Ralte), ラケール (Lakher), ルシャイ (Lushai), ポイ (Poi), アイモル (Aimol), アナル (Anal), モヨン (Moyon), モンサン (Monsang), プルム (Purum), ギャンテ (Gangte), チョウテ (Chote), コム (Kom), ランガング (Lamgang), マー (Hmar), ハラム (Halam), シムテ (Simte)